

麦熟れ星

岩崎 嘉子

立春の顔上がりくるエスカレーター
スターバックスの足つかぬ椅子亀鳴けり
テレワークのビル街無人鳥曇り
露の臺揚げてコロナの翳払う
かぎろうは青き地球よ万の死者
オンラインの処方箋着く花の闇

「お願いがあります。俳句のお誘いを受けただけれど、句会の席に、一時間ほど黙って座っていて頂けないでしょうか」と娘が申します。遠山先生の茶道入門に当たり同道した責任から代役を果たすべく「絶対に一度だけ」と座の一隅に座ったまま、三十五年の月日が流れました。

こんな私に、陸賞という冠は重過ぎて辛い

人間以外みないきいきと花万朶
莢とれば空豆青き酸素の香
禁足の空は瑠璃色蝶になる
アルコール卵の花腐しの指に浸む
植えし田をゆらす空砲月細し
マンゴーゼリーぽわんと掬い梅雨に倦む
流人の島栄螺の棘の長かりし
光源は下校少女ら羽蟻翔つ
漆黒の髪より湧ける草螢
青柿を蹴れば嘴跡みんな蹴る
土用三郎闇に尾を曳く火球の弧
セリセリと崖を崩せるかき氷

のですが、主宰の「遠山先生がお慶びでしよう」というお言葉に励まされ九十三歳を鞭打つてありがたく拝受しようと思いました。

今、振り返って長い年月何をしていたのか、どう考えても分かりません。現在も試行錯誤の毎日で、「出来た」「これでいい」と思ったことはありません。これからも新しさを求め出口を探し、その上、贅沢にも私の独自のスタイルを目指して努力していこうと思つています。

中村先生。編集部。

東京句会の皆様。そして、三十三年間連れ添

黒^く四^ろダ^よム^んの帰途は鱒^{ます}ずし立秋忌
青ペデキユアだらだら祭漂えり
マンゴ一の傷匂いおり麦熟れ星
夕蟬の降れば風呼ぶ皇子^{みこ}の塚
太刀魚の背鱗を透かす晩夏光
鼻うたは「黄昏のビギン」浮塵子とぶ
もりもりとラガー入場日が匂う
冬のアリア見えぬあなたが居て灯る
雪しんしん黒森歌舞伎はいま濡れ場
顎深く沈め凍鶴の心地かな
井戸の水漕ぎ出している鍬始
鶴^{こう}の鳥の赤きまなじり冬田打つ

ってくださいった、おし
沼句会の朋友。最後に、
俳句の世界に招き入れ
てくださいった遠山先生。
本当にありがとうございます
いました。